野山の花

— 身近な山野草の食効・薬効 —

城西大学薬学部　白瀧 義明（*SHIRATAKI Yoshiaki*）

セツブンソウ *Shibateranthis pinnatifida*（Maxim.）Satake & Okuyama（キンポウゲ科 Ranunculaceae）

セツブンソウ（節分草）は関東では，２月下旬，その名のとおり，冬から春の季節の分かれ目の頃に可憐な花を咲かせます。本植物は関東以西の石灰岩地帯の樹林内に群生する日本特産の植物で，高さは花の咲くもので８～ 15 cm ほど，白く花弁のように見えるのはがく片で，普通５枚あります。内側の黄色く先がＹ字状に２裂しているものが花弁の名残りで，10 個程あり，裂片の先は蜜腺化しています。雄しべは多数，葯は青色，雌しべは数本あり，ややくすんだ桃色をしています。根際から生える葉は長い柄のある五角形で，３つに裂けたものが２つに裂け，更に羽状に細かく裂けています。花の咲いた後にはそう果（熟すと乾燥する小型の堅い果実。裂開せず，普通，中には種子が１つ入っている）をつけ，地中には球形の塊茎があります。他の草木が芽を出さない早春に花を咲かせ，他の草が大きく伸びる初夏には，地上部は枯れてしまい，カタクリと同じようにスプリング・エフェメラル（spring ephemeral）とよばれる春植物の一つです。本植物は，いわゆる双子葉植物ですが，実生の１年目は広楕円形の子葉を１枚しか出さないという変りものです。２年目以降の個体は１月末近くに，塊茎から茎を伸ばし，茎頂に複雑に裂けた総苞葉をつけますが，総苞葉に柄はなく，茎を囲んだ状態で花茎は総苞葉を抜け出るようにつきます。

よく似た植物に，いわゆるキバナセツブンソウがあり，春先，花屋さんの店先で見かけます。キバナセツブンソウの原種はヨーロッパからアジア南西部に分布し，セイヨウセツブンソウ *Eranthis cilicica* といわれるものとオオバナキバナセツブンソウ *Eranthis hyemalis* といわれるものがあり，園芸店では両種の種間交雑種であるヨウシュセツブンソウといわれるものが多く流通しているようです。これらは黄色いガク片が６枚あって花弁状となり上向きに咲きますが，本来の花弁は黄色く小さな筒状になって蜜腺化しています。袋果には果柄があり，セツブンソウの結実が２～３個に対し 10 個ほど実ります。地下茎は毎年伸びて，新しい地下茎をつくり成長します。キバナセツブンソウは，芽生えのときに２枚の子葉を出し，総苞葉に柄がなく，大きく３裂し，さらに裂片が２～３裂します。葉はやや厚く表面には光沢があり，茎もセツブンソウより太く，全体にシッカリとした感じがします。これらの英名は Winter aconite すなわち，冬のトリカブト（狭義には *Eranthis hyemalis* の英名）の意で，有毒成分のアコニチンを含みますので，誤って食べた場合，嘔吐，頭痛，麻痺などの中毒症状を起こす恐れがあります。

セツブンソウの可憐な花は人気が高く，現在は乱獲や自生地の環境破壊によって希少植物となり環境省のレッドリスト（2007）では，準絶滅危惧植物に登録されています。埼玉県秩父郡小鹿野町の自生地は日本一の規模といわれ，毎年３月上旬に開花します。

写真１　セツブンソウ１（花）

写真２　セツブンソウ２（花）

写真３　セツブンソウ（遠景）

写真４　キバナセツブンソウ